

## 電信

保存期間：令和4年12月31日迄

主管

総番号 R0459298

主管

令和元年12月31日 [REDACTED]

レバノン発 中東1

令和元年12月31日 [REDACTED]

本省着

外務大臣殿

大久保武大使

注意

日・レバノン関係（カルロス・ゴーン氏の日本出国及びレバノン入国：報道）

第2149号 [REDACTED]

12月31日、当地各紙は、カルロス・ゴーン氏の日本出国及びレバノン入国を報じているところ、概要以下のとおり。

## 1 デイリースター（英字紙）

日産を追放された元CEOのカルロス・ゴーン氏はレバノンにいるとの声明を発し、「不正な（rigged）」日本の司法制度の「人質」となることを拒否する旨述べており、世界で最も有名な重役が日本での裁判が始まる数ヶ月前にどのように出国できたかに注目が集まっている。

ゴーン氏の突然の出国は、グローバルな自動車メーカーである日産とルノーの提携関係を揺るがし、日本の司法制度の公平さについても厳しい視線を投げかけるものとなった。

ゴーン氏は声明で次のように述べた。「私は現在レバノンにいる。有罪が前提とされ、差別が蔓延し、基本的な人権が無視されている不正な日本の司法制度の人質ではもはやない。私は正義から逃げたわけではなく、不公正と政治的迫害から逃げたのである。私はようやくメディアと自由に話せるようになった。来週から始動することを楽しみにしている。」

ゴーン氏の日本出国がどのようになされたかは不明であり、在京レバノン大使館は「我々は何も情報を受け取っていない」旨述べた。

レバノンは日本との間に犯罪人引き渡しに関する司法協定を結んでおらず、日本の法務省によれば、ゴーン氏を東京に引き戻し裁判に出廷させることは難しいとのことである。

電  
電  
報  
の  
に  
取  
關  
り  
す  
扱  
る  
照  
は  
会  
慎  
は  
重  
情  
に  
報  
願  
通  
信  
ま  
課  
す  
電  
處  
理  
班  
  
内  
線  
四  
二  
一  
三  
・  
四  
二  
一  
四  
に  
連  
絡  
願  
い  
ま  
す

# 電 信

日本のテレビ局NHKによれば、不特定のレバノン治安当局者からの情報として、ゴーン氏に似た人物が別の名前を使ってプライベートジェットでベイルート国際空港に入国したこと。

ウォールストリートジャーナルによれば、ゴーン氏は日本を出国し、トルコ経由で月曜日にレバノン入りしたとのことで、近日中にゴーン氏は記者会見を開くと報じられている。

## 2 MTV（アラビア語テレビ放送局のネット記事）

30日夜、カルロス・ゴーン氏の日本逃亡の報に接し、外国報道記者は忙しい時を過ごした。ゴーン氏は近く日本で裁判にかけられる予定であり、日本の強固なガードからこのような形で逃れるのは簡単ではないため、当初、情報が出回った際に多くはこれを重要視していなかった。

レバノンでは報道が出回った際、日本大使はちょうど会食中であった。MTVは取材を試みたが、日本大使は報道に驚くとともに、日本政府としては何も本件に関する情報を有していない旨述べた。

この時、ゴーン氏は既にベイルートにいた、詳しくはキャロル夫人の家族の家にいたのである。この報道が出る何時間も前からベイルートにおり、情報筋によると、ウン大統領とも面会し、またレバノン当局の手厚い警護を受けていたとのことである。

ゴーン氏はまるで警察映画のようにレバノンに入国した。オペレーションは「バラ・ミリタリー(bala askariya)」というグループによって実行され、米国にいた夫人も同行していた。日本の住宅で夕食に楽団を呼んでコンサートを行った後、同楽団の運ぶ楽器ケースに隠れて運ばれた後、日本の空港から出国した。

どのように彼が空港の出国管理を通過できたかに疑問が集まっている、それは不明のままであるが、最も重要なことはそのパスポートである。彼はフランスのパスポートを使ってプライベートジェットでトルコ経由でレバノン入りしたと見られているが、どのようにしてフランスのパスポートを入手できたのであろうか。

## 3 リワー紙（アラビア語）

日本で逮捕されていたカルロス・ゴーン氏は、トルコ経由でベイルートに到着し、バアブ

注意  
電報の取り扱いには会員は重情に報願通い信ま課す  
電處理班 内線四二一三・四二一四に連絡願います。

# 電 信

ダ宮殿を訪れ、アウン大統領と面会したとされる。ゴーン氏は、複雑な警護オペレーションを経てトルコからプライベートジェットでレバノンに到着した。情報筋によれば、西側の国の警護組織が出国・入国オペレーションを実行し、ゴーン氏保釈中に日本を出国することを禁ずるという日本の検察判断をすり抜けることを可能とさせた。

## 4 ナハール紙（アラビア語）

ジュライサーティ大統領府担当国務大臣は、ナハール紙に対して、カルロス・ゴーン氏のレバノン入国に関して、「私はゴーン氏の日本出国に関して何も情報を持ち合わせていない」旨述べた。また、ジュライサーティ大臣は、先日会談した日本の外務副大臣に、日本の当局が国連腐敗防止条約に基づきゴーン氏をレバノンに引き渡すよう要請している件を伝えたと述べた。

アルベルト・サルハン司法大臣は、昨夜ナハール紙に対して、ゴーン氏がレバノンにいるかどうかについて承知していない旨述べた。

転電《添付無》シリア危機関係公館、キプロス（了）

注意  
一二  
電報の取扱いは慎重に重視願います  
課題課  
電處理班 内線四二一三・四二一四に連絡願います。